

【ポスター発表】

こども食堂の成果に関する検討 —活動を通して教員養成課程の学生が得たもの—

○ 兵庫教育大学 加納 史章 (009126)

キーワード：こども食堂、教員養成課程、生活にふれる機会

1. 研究目的

近年、こども食堂の活動がニュースや新聞等で話題となり、全国各地で大きな広がりを見せている。その増加の背景には、食事という誰もが身近に感じる営みであることや、こども食堂という親しみやすいネーミング、そして、子どもの貧困との関連が挙げられよう。

こども食堂の一般的な役割として、「地域の大人が子どもに無料や安価で食事を提供する、民間発の取り組み」「経済的に困窮していたり、ひとり親で食事の支度が思うようにできなかつたりするなどの事情をもつ家庭の子どもに無料、あるいは低価格で食事を提供し、団欒を楽しむ場」であるといえる。また最近では、食事だけでなく、地域住民やボランティアの人々と交流しながら、遊びや学習支援の場としての役割も求められている。

本研究は、こども食堂の“成果”について着目していく。ここでの成果とは、こども食堂に通う、もしくは関わることで得られる結果である。例えば、子どもや保護者がこども食堂に通うことで楽しさや安心感などを得ていると予想できよう。また、スタッフやボランティアも子ども対応、地域の社会資源などの知識や技術を得ていると考えられる。それらを踏まえ、こども食堂に関する研究を概観したが、こども食堂の役割や意味付け、実践報告などに留まり、成果について学術的に論証されているものはなかった。

さらに、今回教員養成課程の学生を調査対象としている点にも意味がある。こども食堂に共通する特性として、「多様性」「創意性」「地域性」の3つがあり、筆者がスタッフとして加わっているA県B市にあるNPO法人Cのこども食堂では、教員養成課程の学生がボランティアで参加しているという特長がある。現状として、こども食堂と学校現場との連携が模索されており、多くのこども食堂が学校との協力体制を望んでいるという報告も上がっている。そこで、教員を目指す学生がこども食堂での活動を通して何を考え、意識や言動の変容があったのかを明らかにすることは今後の学校現場との連携の礎になると考える。

2. 研究の視点および方法

こども食堂が子どもの居場所や子育て支援、地域コミュニティ再生などの役割を担えることは著書や雑誌記事等の報告からもわかる。そこで、次のステップとして、子どもや保護者、スタッフ・ボランティアがこども食堂から何を得ているのかを明らかにすることは、新たな研究の視点となり得るのではないか。

本研究は既述したように、ボランティアである学生を対象とし、筆者による学生の事例

収集およびインタビュー調査から彼らがこども食堂から得たものを描き出している。また、研究方法として、事例は併用観察法を用い、鯨岡（2005）のエピソード記述を参考に記録を取った。インタビューについては、学生5名に半構造化インタビューを行い、得られたデータはテキストマイニングソフト KHCoder（Ver. 2. beta. 30f）で分析を行った。

3. 倫理的配慮

個人情報取り扱いおよび研究者倫理に関しては、日本社会福祉学会研究倫理指針、筆者が所属している兵庫教育大学研究者倫理規定を遵守し、事例とインタビューの対象者に説明・同意のもと、対象者に不利益にならないよう配慮を行った。

4. 研究結果

紙面の関係から、子ども視点の事例（「〇〇さんがいい！」）を紹介する。

【背景】男子学生ボランティア D（以下、学生 D）と E 児（7歳）は、こども食堂で一緒に遊ぶ姿がよく見られた。E 児は学生 D を慕っており、学生 D がいないと必ず「〇〇（学生 D の名前）さんは？」と尋ねていた。また E 児の保護者とスタッフの関係も良好で、家庭環境について話を受け、E 児に対して、年齢等を考慮し、スタッフとの関係構築を視野に入れた関わりを継続的に行うようにしている。

【エピソード】今日もご飯ができるまで、学生 D と笑顔で楽しそうに遊んでいた E 児。そして、ご飯も学生 D の隣に座り、嬉しそうに食べていたが、学生 D が別の子と話を始めると、ずっと笑顔が消え、食事も途中で部屋から出て行ってしまった。そんな E 児の様子に気づいた学生 D は声をかけるが、E 児には聞こえていなかった。学生 D は追いかけるが、どんどん先に行く E 児。しかし、途中で振り返り、学生 D が追いかけてきていることを確認していた。そんなやりとりを 4～5 回繰り返す中で、E 児から徐々に笑い声や笑顔が見られるようになり、最後は学生 D が E 児に追いつき、二人一緒に部屋へと戻ってきた。

【考察】この出来事後、学生 D と話をする機会があった。「E 児の家庭環境については、スタッフのミーティングなどで聞いていたが、まさか、隣の子と話ただけで気持ちが揺れ動くとは思わなかった」という。そして、「子どもと一対一で関われることはすごく勉強になる」と話しており、この出来事から学生 D が新たな学びを得たことがわかる。さらに、将来教員になった際、個別配慮の必要な子どもへの対応にも繋がると考えられる。

5. 考察

事例から、学生がこども食堂に関わることで、子どもの生活にふれる機会となっていることがうかがえた。また、子どもの表情の裏にある家族との関係についてもふれており、どこまで関わって良いか悩むという意見もあった。今回の研究は 1 カ所のこども食堂で行っており、データを蓄積することでまた異なる観点が出てくることが期待される。